



神社と四季「お弓神事」

輝かしき令和六年の年頭に際し、皇統の無窮と、各御社頭のご隆昌、氏子崇敬者皆さまのご多幸を祈念し、次回神宮ご遷宮にむけ神職・総代を中心に心新たに怠る事なく進めてまいりる所存です。個々の神社の枠を超えた連携が一層重要となる今日、神社庁の諸施策にご理解ご協力の程お願い申し上げます。ご挨拶いたします。

清々しい新春をお迎えの御事とお慶び申し上げ、謹みて皇室国家の弥栄と各御社頭の御清栄を壽ぎ奉ります。

国民生活に甚大な影響を及ぼし、斯界においても伝統祭祀が軒並み中止あるいは縮小と神社信仰の上に大きな影を落とした新型コロナウイルス感染症も、漸く昨年五月より感染症法上「五類」に位置づけられ、各自の自主的な取り組みへと変わりました。コロナ禍の三年間に、それぞれの地域の歴史を反映し、地域の結びつき、生活の重要な部として世代を超え多くの人々の手により長く大切に守り伝えてきた伝統行事が失われつつあります。中断あるいは縮小された伝統神事を復興し以前の賑わいを取り戻す。この祭りの再興こそ、地域の人々の繋がりをより強固なものとし、御祭神への感謝、受け継いで来た信仰心が郷土愛を育み、故郷への誇りを培う大きな核となり、延いては子孫の繁栄へと繋がるものと確信しております。また本来進めるべき神社庁の業務も大きく遅れており、今後主要な懸案事項の解決に向け早期に結論を出すべく努力いたす次第です。



謹賀新年

広島県神社庁長 吉川通泰



広島県神社庁報

ふたば

二葉

第152号

発行所 広島県神社庁

広島市東区二葉の里

☎ (082) 261-0563

FAX (082) 261-6628

非公表

非公表

神職専門研修会(祭式・衣紋)を受講して

佐伯大竹支部 厳島神社

権禰宜 海野亮太

去る九月二日、神職専門研修会に参加させていただきました。

祭式作法、衣紋についての研修会で、県の祭式講師でいらつしやいます福場快之先生、重白将彦先生、また助教として渡部公彦先生、久保田桂子先生をはじめとして、教化委員の方々など、その道の識者たる先輩方にご指導をいただきました。

特に、私共、厳島神社から参加の三名は、祭式作法においては基礎の部、衣紋においては一人での著装の部を受講させていただきましたので、その内容と学びについて共有旁々、ご報告をさせていただきます。

まず祭式作法基礎の部に関しましては、全体の講師としては重白先生に、助教として久保田先生にご指導いただき、また飯田誠教化委員長にも縷々ご教示をいただきました。

内容としては、拝や揖といった作法の具体的な動作についての説明があり、それを踏まえた上で祝詞座に進み出た上、再拝二拍手一拝の後、復座するという動きの練習などがありました。

神職としては、神事のみならず、日々の祈禱においても全てに祭式作法が関わってきます。講義の中で重白先生がおっしゃっていました、作法の組み合わせで行事となつて、行事の組み合わせで一つの神事が出来る、とすれば、当然、神職たる者、作法が出来ていないと神明奉仕もままならない訳ですが、私個人の所感と致しまして、この講義を通して基本の作法がいかに臚げになつていたかを痛感しました。

まず拝礼作法の角度が、日々の神明奉仕の中で自省を怠つた結果、今回の講習会で幾度か角度を是正していただくこととなりました。特に浅い平伏の角度が、必要以上に深くなつており、個人的には蒙が啓けた気分でした。

この角度一つとっても蔑ろにすることは出来ません。講義の中でもおつ

しやつていたと思いますが、正しく作法を行うことに心が寄り添ってくるものだと思うからです。

他にも正しい笏法や、普段あまり意識出来ないところとしては、緩歩、平歩、急歩といった歩行に関する事など、細かい部分に至るまで色々ご指導いただきましたが、こうした普段あまり意識できていないような一挙手一投足に注意を向けるきっかけになったことが、この講習会での大きな学びでした。

また、祭式の後には衣紋の講習では福場先生に一人での著装をご指導いただきました。

二時間という限られた時間の中でのことでしたが、一度着付けの流れ、要所要所での注意点について教わつた後、実際に自分でも着てみるという形でした。

著装した姿を福場先生に見ていただきましたが、全体的に装束が高めになつているとのご指摘がありました。確かに欄の位置が少し高くなつており、座つた際、膝頭をしっかりと覆つていませんでした。

それを踏まえた上で二度目の著装を試みましたが、もう少し長くしようとすれば、込みの位置も下げないと全体のバランスが悪くなり、込みを下げると装束の長さの関係でほとんど巻き込めなくなつて不安が残るなど、あちらを立てればこちらが立たずのような状況となつて、結果的に一回目よりは上手に着付けられたとは思いますが、課題が残る結果となりました。

総括として、今後の神社での奉仕に当たつて、今回の研修での学びを生かし、より真摯な神明奉仕に努めて参りたいと思います。



広島県神社総代連合会研修会に参加して

■尾道御調神社総代連合会

会長 笠井公俊

新型コロナウイルス感染症対策で令和二年からあらゆるイベントが中止となり、県総代会研修会も開催されませんでした。令和五年になり感染症対策も緩和され、各地でイベントが開催されるようになって、この度県神社総代会主催の研修会が令和五年九月八日（金）から九日（土）に廿日市市宮島町で開催され二十一名が参加しました。

一日目は観光船に乗り厳島神社の鈴木寿宗禰宜から各所説明を戴きながら、宮島を二周する七浦巡りを行いました。宮島の周囲は七里三十二丁（三十一キロメートル）天候もよく波も穏やかで快適に九つのお社を巡拝しました。その後、海側から厳島神社に参拝しました。このように船で鳥居に接近したのは初めてでとても感動しました。降船後、大元神社に参拝しました。

鳥居修復の経緯について厳島神社技師、原島誠様の講義を受けました。鳥居は明治八年（一八七五年）に再建され本柱は楠を使い、国の重要文化財、世界遺産に指定されています。社殿から一六〇メートルの海上



にあり、柱の廻りは九メートル、総重量は六〇トンです。海水や害虫により鳥居の内側・外側が傷み、空洞ができて少しずつ修復していましたが、倒壊の危険性もあることから大規模な改修工事が令和元年六月十七日から始まり令和三年十二月十八日に完了しました。

二日目は厳島神社（野坂元明宮司）に正式参拝しました。御祭神は市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命であり、推古天皇元年（五九三年）に建てられたものです。廻廊を海水から守るため隙間ができていて、ハイヒールなどの履物は、ヒール部分が隙間に入り込み危険なので使用不可である事など伺いその後、宝物館を見学しました。

明治時代に豊臣秀吉公、加藤清正公が祀られた豊国神社に自由参拝しました。床は、八五七畳敷かれる広さがあり、周囲は扉などなく開放状態で風が吹き抜け涼しく感じました。

今回、世界遺産の厳島神社に来て今まで体験していない「七浦巡り」など貴重な体験をしました。また、総代研修で奥茂宣副庁長、長島内の総代及び、神社庁の職員の方と共に食事しながら神社活動などについて語るとは、神社活動を活性化するものと確信しています。今後も総代会で色々な研修会を企画して頂き各支部で積極的に参加するよう心がけなければならないと考えています。



シリーズ

神社の社紋について⑤

庁報編集委員会

亀甲紋【その1】

はじめに(亀甲紋とは)

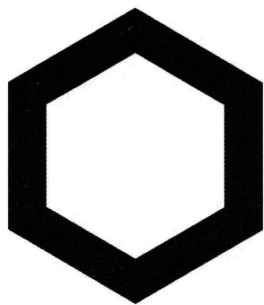
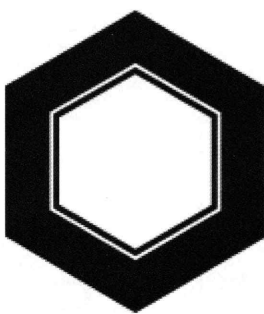
亀甲紋は、亀の甲羅のような正六角形の連続紋四様(いくつもの円の円周を四分の一つづつ重ね、上下左右に連続させている模様)から紋章化したものです。世界中で使用された古代文様で、日本には大陸から渡来したとされ、五世紀以降の古墳から出土する太刀の柄頭に多く見られます。

当時、中国では亀の甲羅を用いて占いを行う「亀卜」による政策決定や意思決定が盛んに行われていました。表面がひび割れるまで長時間にわたって甲羅を焼き、ひびが入った方向や形状を見て吉凶を判断していたそうです。

日本には、海亀が産卵を終えて海に帰るときに酒を飲ませて帰すという風習がありました。これは「亀」がめでたい動物で、海の化身と考えられていたからです。紋のなかで亀甲紋が格別な扱いをされているのは、そういう理由からです。

平安時代以降は織物や調度品に幅広く採用され、着物・帯・陶器・金彩など、亀甲文様を用いた華やかな品々が登場しました。

鎌倉時代以降は武士の間でも使用され始め、それ以降一般の人々の目にも触れるようになりました。

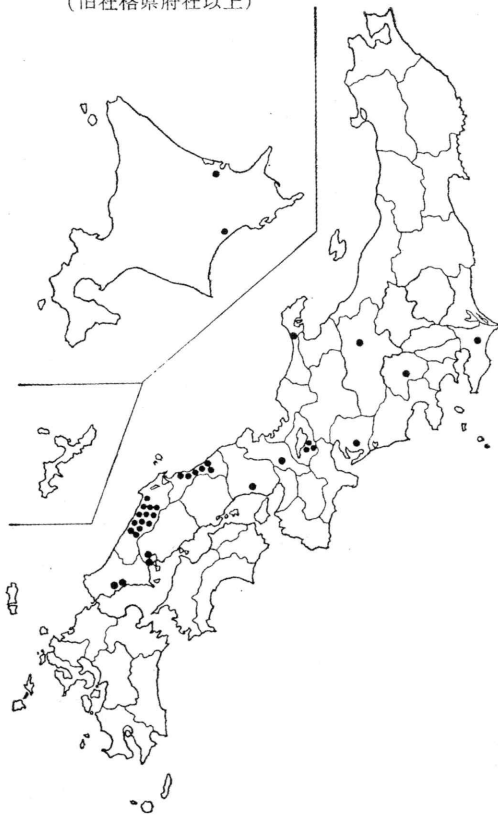
一重亀甲
【亀甲】

二重亀甲

亀甲紋の分布

亀甲紋の分布

(旧社格県府社以上)



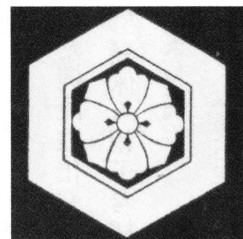
亀甲紋の分布(旧社格県府社以上) 出典:『神社総覧』丹羽基二 講談社平成28年刊

亀甲紋の主要神社

亀甲紋は多くの神社が神紋として使っています。特に、島根・鳥取両県にきわめて多いことがわかります。古来中国では、四方を守る四神の北方鎮護の神として「玄武」があり、「亀」をもつて表して使っています。『爾雅』(中国最古の類語辞典)にも「北方を亀と成す」とあり、この思想が日本に伝わり祭神と結びついたものと考えられます。亀甲紋を用いる神社の多くは、出雲大社と同じ大國主命(大物主命・大己貴命・大穴牟遲命・大名持命・八千矛神など)を祀っています。また、他の祭神の場合でも出雲地方の神社の多くが亀甲紋を用いています。つまり、出雲系の神々の共通のシンボルであると思われる。

島根・出雲大社【三重亀甲に剣花菱】

出雲大社は、大國主命を祀ります。出雲国に鎮座し、明治以前は杵築大社と呼ばれ、北方を鎮護していました。神紋は北の方角を表す玄武にちなみます。中の「剣花菱」は、「花菱」に四本の剣を加えて描きます。



「花菱」とは、大陸から伝来した「菱」【ミソハギ科の水生の一年草】の連続模様をいいます。

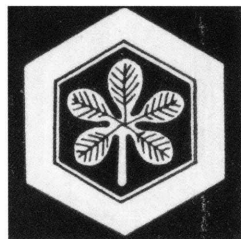
石川・白山比咩神社【三子持ち亀甲に瓜花】

霊峰「白山」をご神体とする白山比咩神社は、全国各地に祀られている「白山神社」の総本社です。祭神は、白山比咩大神（菊理媛命）と伊弉諾命・伊弉冉命の三柱をお祀りしています。神紋は、長寿を表す亀甲に、「三子持ち」は、親から子へ、子から孫へと、過去から現在そして未来へ絶えず続く家運長久・子孫繁栄と神人和楽を表しています。



岡山・志路神社【二重亀甲に梶の葉】

志呂神社のある三樹山は、鎮守の森としてこれまでほとんど手が加えられることなく原生林として今日まで伝えられています。また、北方系と南方系の植物が同居する珍しいところ。祭神は事代主命を祀り、周辺には古代より神木として尊ばれていた「梶」が多く生えていたことから、神紋に使われたようです。



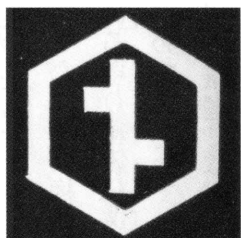
秋田・新波神社【二重亀甲に蒲の穂】

新波神社は、大國主神・建御名方神・八坂刀売神を祀っています。神紋は、大國主神が因幡の白兔を救うのに「蒲の穂」をもつてした故事に由来します。



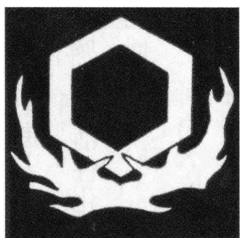
愛知・砥鹿神社【亀甲に亀卜】

砥鹿神社に祀られている大己貴命は、諸国を巡り、但馬国からさらに三河国に向かい、本宮山に留まったとされています。神紋は古代の占い「亀卜」に由来します。



滋賀・兵主神社【亀甲に鹿角】

兵主神社は、八千矛神（別名…大己貴命）を祀っています。もともと坂本の穴太に鎮座していましたが、欽明帝の時、祭神の大己貴命は、大亀で琵琶湖を渡り、さらに鹿にまたがり現在の地に御鎮座されたことから、「亀甲に鹿角」の神紋になりました。



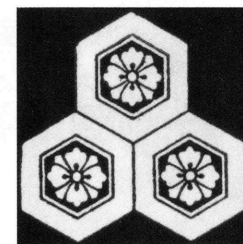
鳥取・大神山神社【二重亀甲に社号】

伯耆大山は神体山として、大己貴命が鎮まるとされています。出雲系の神を表す亀甲紋に、社名が入った神紋になっています。



広島・厳島神社【三ツ盛り二重亀甲に剣花菱】

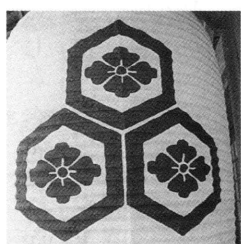
厳島神社は、日本三大弁天の一つで、世界遺産です。平家一門が奉納した「平家納経」具などは国宝に指定されています。神紋は、祭神の鎮座に関わり深く、島内の末社「御床神社」の社前に広がる大きな岩盤の裂け目の模様が起源とされています。



広島・速谷神社【三ツ盛り亀甲に花菱】

速谷神社の御祭神は、人皇十三代成務天皇朝、安芸国造に任ぜられた「速谷神（飽速玉男命）」です。

神紋の「三ツ盛り亀甲に花菱」は、亀の甲羅になぞらえた正六角形のなかに「花菱」を描き、それを三つ寄せて山のように積み上げています。



福岡・櫛田神社【三ツ盛り二重亀甲に五三桐】

博多の総氏神様として、最古の歴史を有し、左に素戔鳴命（祇園宮）、中央に大幡主命（櫛田宮）、右に天照皇大神（大神宮）が祀られ、神社には三つの神紋があります。「三ツ盛り二重亀甲に五三」は、大幡主命の神紋です。



中国地区教化会議報告

■ 尾道御調支部教化委員 厳島神社 宮司 郡山龍

令和五年八月二十九日から二日間に渡って、広島市内で中国地区教化会議が開催されました。中国地区教化講師の櫻井建弥講師、錦田剛志講師を始め、山口県、島根県、鳥取県、岡山県、広島県の夫々の神社庁からの参加者を合わせて総勢二十六名で教化活動に関する情報交換と今後の取り組みについての検討が行われました。

山口県からは、神宮大麻の増頒布特別委員会を設置して、「神棚差し上げます」の企画を新たに実施したことや、巫女さんを対象にした研修会、企業への神宮大麻増頒布の取り込みについての活動報告をいただきました。特に神棚の配布に関しては、告知方法やQRコードを読み込んだの申込みに関して、岡山県から貴重なアドバイスをいただきました。

島根県からは、神宮大麻の頒布率が高い中、この十年間の状況に関してのご報告と研修会に関してのご説明がございました。神宮大麻の頒布は各神社庁でも熱心に取り組んでおり、情報交換と共に今後の活動に関しての活発な議論が行われました。

鳥取県からは、ホームページの制作や夏休み親子参拝団などに関するご報告がございました。ホームページの制作は他の神社庁でも力を入れ始めており、様々な対象者に向けた機能強化や掲載内容の充実に関して活発に意見交換が行われました。夏休み親子参拝団は他の神社庁からの関心が高く、多くの質問がなされました。

岡山県からは、絵本の作成、巫女体験、注連縄作り体験、神宮の奉賛及び神宮大麻の増頒布などに関してのご報告がございました。神宮の奉賛

及び神宮大麻の増頒布の取り組みに関しては、数多くのグラフなど豊富な資料を交えて年齢や性別、神棚を祀る場所などの分析結果に関して詳しく説明してくださり、他の神社庁の今後の取り組みに大変参考になりました。

広島県からは、教養研修会、神職専門研修会、神職実務研修会、神宮大麻頒布推進リーフレットや教化ポスター、神社庁年末年始テレビCM、過疎地域神社活性化推進事業などについてご報告させて頂きました。特に実務研修については参加者の関心も高く、多くのご質問をいただきました。また、神宮大麻頒布の取り組みも関心を集めました。

夫々の神社庁からの多くのご報告を頂きましたが、事前に資料が配布されていたため、短い時間でも密度の濃い会議となりました。各神社庁からの報告に続いて、「アフターコロナにおける神社の教化活動について」を主題とした意見交換が行われ、神社と地域を深める取り組みに関しての情報交換が活発に行われました。

提案議題では、神宮御当局から謹呈される「簡易神棚」の活用状況について、一般に對する教化事業についての広報告知の手段、一般を交えての教化事業における地方自治体等からの協賛・後援についての意見交換や検討が行われました。

最後に中国地区教化講師の櫻井建弥様と錦田剛志様から講評をいただき、今後の教化活動の励みになりました。



支部だより

福山支部

「夏越の大祓祭をおえて」

去る六月の末日に、福山市曙町に鎮座する塩崎神社（神原勇氣宮司）、福山市川口町に鎮座する八幡神社の両社で夏越の大祓の祭（茅の輪くぐり神事）が本年度も無事に斎行されました。近年では、年間のお祭りの中でも、初詣に次いで、多くの参拝者の方で賑わいます。暑い夏を家族みんなが元気に過ごせるようにと、半年間の罪穢れをお祓いし、元の氣、「元氣」を取り戻していただけるよう、神職一同祈りを込めてご祈禱いたしました。形代にはご家族お一人お一人の願いや思いがこめられています。その祈りが神さまに届きますよう、一語一語思いをこめて祝詞を奏上いたしました。また、当番組総代様により、本年度も見事な茅の輪を準備していただきました。夏の到来を感じさせるこのお祭りがまた来年も無事に斎行できますよう、年末まで皆が健康でありますよう祈るばかりです。

（神原勇氣 通信員）



安芸高田支部

「亀尾山神社の御座舟神事 管絃祭」

山あいの安芸高田市高宮町川根鎮座の亀尾山神社（三上千登勢宮司）で御座舟神事「管絃祭」が行われた。日本三大舟神事のひとつに安芸宮島の「管絃祭」があるが、亀尾山神社の管絃祭は、宮島の管絃祭と同じ日、八月三日（旧暦の六月十七日）に行われている。江戸時代ころから続いているという。

神事で三上宮司が祝詞を奏上、田原幸男総代長、唯杉幸正頭取らが玉串を奉奠後、御座舟出發地で御幣を御座船に奉戴、竹で作り提灯などを飾り付けた御座船は台車に載せ、若衆たちにより夜道の地域を巡った。

亀尾山神社鳥居下に到着後、太鼓の音を合図に若衆が参道階段を、御座舟の到着をまつ神社の境内に激しい動きで押し上げ、神職の迎えを受け御幣を神社に奉納した。

今は御座船を台車の上に載せて引いているが昔は氏子らが担いでいたという。祭りは五年前に管絃祭を取り仕切る頭取を引き継いだ唯杉幸正さんらが中心となつて、祭りに合わせ帰省する人たちを含め、若い担い手ら約二十人が支えている。

（波多野公一 通信員）



三次支部

「第八ブロック研修会開催」

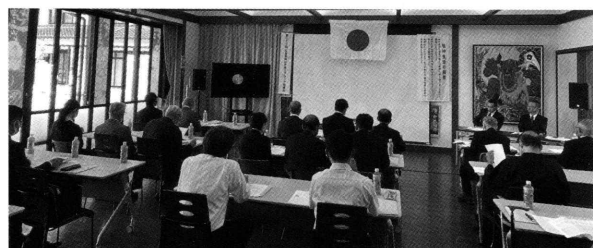
去る令和五年九月十二日に三次支部主管で第八ブロック研修会を開催いたしました。コロナ禍では中止あるいは規模を縮小し行われてきましたが、コロナ対策も五類へと変わり、本年より通常通り開催することができました。

今回は三次支部内で行っている色々な取り組みや過疎対策について発表をさせていただきました。第八ブロック内の支部は、どこも過疎の問題を抱える地域であり、共通の危機感を持っていると感じております。それぞれの支部、各神社で取り組みはされているとは思いますが、情報を共有することで新たな取り組みのヒントになったのではないかと思います。

参加された皆さんからは、清掃作業について神社主体なのか、地域主体なのかなどの質問も多くいただき、やはり関心度が高いことを改めて感じました。

過疎については、今後ますます対応が必要となり、支部の垣根を越えて協力をしていかなければならないと感じた一日となりました。

（小島直樹 通信員）



安芸高田支部

「石田山神社大しめ縄奉納」

安芸高田市高宮町房後鎮座の石田山神社（穂田公男宮司）は、九月の例祭を前に拝殿正面向拝の虹梁に大しめ縄の架け替えを行った。架け替え後、氏子らが参列し穂田公男宮司によつて奉納奉告祭を執り行った。穂田宮司が祝詞を奏上、角保雅史総代長や氏子らが玉串を奉奠した。

従前の拝殿のしめ縄は氏子により手作りしたものを数年おきに架け替えていた。近年、世話人の高齢化、しめ縄の材料の調達、製作に困難をきたすようになったため、氏子の寄進により、しめ縄づくりの高い伝統技術を持つ島根県飯南町の「大しめなわ創作館」に製作を依頼、九月の例祭を前に大しめ縄に架け替えを行い、装いを新たにした。あわせて大鳥居などのしめ縄も架け替える。

高宮町房後地区は緩やかな起伏をもつ高宮丘陵に位置し、石田山神社は房後地域のほぼ中央に鎮座、房後では比較的大きな神社とされている。明治以降石田山神社と称されているが、文化七年（一八一〇）の建立とされている両部鳥居には「八幡宮」と陽刻した木額が掲げられている。（波多野公一 通信員）



世羅支部

「『神議』の行われる出雲路へ」

六月二十四日、神職四名と総代連合会から会長と副会長の二名も参加され、四年ぶりの支部研修として出雲の地を訪れました。

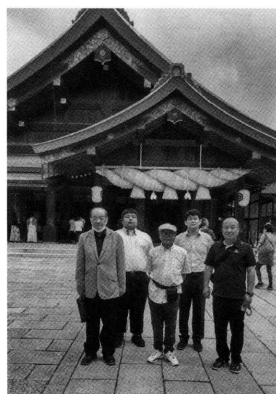
まずは、出雲大社に参拝し万九千神社に正式参拝をしました。他にも古代出雲歴史博物館や出雲弥生の森博物館などを見学し出雲神話に触れ、その歴史に想像を巡りました。

万九千神社では、錦田剛志宮司様にお話を頂きました。「出雲での神在月に出雲路へと参集された八百萬の神々が最後に立ち寄られるのが万九千神社であり神議を締めくくり、神宴（直会）を催されたのち諸国へお旅立ちになられる。」など継承している祭りのことも含め丁寧な説明がありました。

また、「令和の神づくり事業」を企画され、鎮守の森の拡充整備と永代にわたる社殿の護持と整備を、氏子崇敬者のみならず地域や行政なども巻き込み、未来を見据えて積極的に進めておられました。

「神議」が行われ「縁を結ぶ」とされる出雲路で、歴史をたどりながら総代会の方を交えた研修が行えたことを有難く思います。

（林 幸和 支部長）



安佐支部

「鎮魂のキャンドルナイト」

安佐南区祇園鎮座の熊岡神社（岡西亮太宮司）では、八月二十日、広島経済大学の学生達で構成された「武田山まちづくりプロジェクト」が主催する、「鎮魂のキャンドルナイト」が行われた。この祈りの催しは、平成二十六年八月豪雨による土砂災害で亡くなられた方を追悼し、手を合わせる場所があれば、という地元の方々の要望があり、九年前から当神社で行われている。

当日は学生達が伐採した竹を使い、参加者がそれぞれの祈りを込めた竹短冊・竹キャンドルがつくられた。また当時の土砂災害の写真をパネルにして展示し、防災の大切さを訴えるエリアを常設した。十九時になり辺りが薄暗くなると、境内一面の竹キャンドルに火が灯された。その後、神楽台の上で防災クイズや災害時大切にすべきものを啓発する紙芝居が上演され、最後は全員で犠牲者に黙祷を捧げた。

（岡西亮太 通信員）



尾道御調支部

「次世代に繋げる稲作と抜穂祭」

向島の嚴島神社(郡山龍宮司)では、境内の小さな水田と山間の神饌田との二か所で稲を育てています。山間の神饌田は農家さんにお願いで稲を育てて頂いていますが、境内の小さな水田は、発泡スチロールの箱に境内の土を入れて水を張り、高御調八幡神社の前田益弘宮司から分けていただいた稲の苗を境内の小さな水田に植え、毎日みんなで朝夕水やりをしながら稲を育てています。

今年は海に近い境内の水田は例年よりも早く稲が育ち、九月早々に抜穂祭を執り行い、山間の神饌田は例年よりも稲が育つのに時間がかかり、十月の初旬に抜穂祭を執り行いました。いずれも豊作となり、今年もそれぞれの御初穂を懸税として神宮の神嘗祭に御奉納させていただきました。

また、毎年春の田植えの御田植始では氏子崇敬者に稲の苗をお分けしており、それぞれがご自宅に持って帰って稲を育てています。今年は十二家族がそれぞれ稲を育て、向島の嚴島神社に御初穂を御奉納下さいました。

(郡山龍 通信員)



安芸高田支部

「祇園祭と奉納神楽」

清神社(波多野公一宮司代務者)の夏祭り祇園祭が、七月八日(土)毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社で執り行われた。波多野宮司代務者が祝詞を奏上、総代や氏子らが玉串を奉奠した。

古くから吉田の「おぎよんさん」と呼ばれ、以前は境内や参道に多くの露店が並び、子どもなど多くの参詣客を集めたが、今では露店もなく、また、この日、町の家々では祭神の素戔鳴尊が胡瓜畑に隠れ、難を逃れたことから胡瓜を食べない習慣があつたが、時代が移り知る人も少なくなった。

神楽奉納はコロナ禍で三年間中止となっていた。今年は四年振りに神楽が奉納される予定であつたが、当日荒天のため延期となり、二週間後の二十二日(土)に奉納。境内の玉垣に巡らされた木柵に、いくつもの小さな提灯が灯され、本殿にも大提灯がたくさん点灯された。郡山子ども神楽団、吉田神楽団により神楽が奉納され、多くの氏子らが楽しんだ。清神社での神楽は、今年の歳旦祭で元就郡山城入城五百年を記念して奉納されて以来となった。

(波多野公一 通信員)



福山支部

「秋祭りに思うこと」

本年度は三年ぶりに、お祭り当番組、総代様一同、地域の皆様方の思いが一つとなり、前夜祭ではお神楽奉納、また舞姫による浦安の舞奉奏を神さまや皆様に観ていただく機会が持てました。塩崎神社(神原勇気宮司)の舞姫は、中学生二名、小学生一名が活躍しており、学業の合間を縫って稽古に励んでくれました。五穀豊穡、皆の健康と平和を願って息の合った舞を神さまや皆様に届ける事ができました。大変愛らしい舞でした。またお神楽は備中神楽の方々が奉納して下さい、待ちに待ったお神楽を観に、多くの方に参拝を頂き三時間の奉納を真剣に、時には皆で和やかに笑いながら、神さまと一緒に時を過ごしました。神楽師も最年少は十八歳から平均三十代前後の若い舞人で、若い方がお祭りに参加すると、未来に希望が持てると感じられて、大変活気になりました。

(神原勇気 通信員)



安芸高田支部

「清神社奉納音楽ライブ」

毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社(波多野公一宮司代務者)で、令和五年十月七日(土)音楽を媒介として、神社と地域が新しい形での関わりをつくることができればと、地元吉田町の姉妹、久保田恵美さんと小川美沙さんで作った音楽グループ「ア・セカンド・カズン」が音楽ライブを奉納した。

本殿へ続く参道にキャンドルを灯し、普段見ることの無い幻想的で、神秘的な光景が演出された。音楽ライブにさきがけ、波多野宮司代務者によりライブ成功祈願祭が執り行われ、ライブアップされた本殿正面で、「ア・セカンド・カズン」にギターの住本好之さんを加え、故郷への想いを込めたオリジナル曲「命のバトン」などを歌った。市内外から百人を超える人たちが、秋の夜のひと時、爽やかな歌声に聞き入った。清神社は姉妹にとつて、子どもの頃から、また今も大切な場所、少しでも地域貢献などになればと、来年の奉納にむけ思いを話した。音楽ライブ、本殿のライトアップなど初めての試みは成功裏のうちに終えることができた。

(波多野公一 通信員)



因島瀬戸田支部

「大山神社創立壹千貳百五拾年奉祝大祭」

尾道市因島土生町に鎮座の大山神社(巻幡俊宮司)は宝龜四年(七七三年)に伊予国大三島の大山祇神社よりご分霊を勧請したお社で以来一二五〇年の間、多くの氏子、崇敬者の篤い信仰をあつめている。宮司巻幡氏は「不易流行」即ち「何時までも変わらない本質的なものを大事にしつつ、新しい変化も取り入れる」の心

で、神社の祭礼を尊びながら、時代の流れ(少子高齢化・交流人口・観光・IT・国際化等)に対応し、神社の運営に務めてこられた。近年は、しまなみ海道を走る多くのサイクリストが走行安全、盗難防止の祈願のため参拝されている。奉祝大祭は十月二十八日に多くの来賓、氏子崇敬者が参列され厳粛に執り行われた。この度の記念事業として令和

の御代に入り楠庭昇鯉之滝造成、IT化の充実、上拝殿土間化・スロープ増設等を成し、令和七年には新本殿起工、令和九年には遷座の予定である。

(河野しんや 通信員)



広島市支部

「重陽祭」

去る九月九日(土)、広島市中区基町に鎮座する広島護國神社(藤本武則宮司)にて、重陽祭が斎行された。九月九日は五節句の一つである重陽の節句である。古来より「菊の節句」とも呼ばれ、菊酒を飲んで無病息災・健康長寿を祈る風習があつたという。

当日は午前にも重陽祭祭典を斎行。午後三時より篠笛奏者の秋吉沙羅氏とギタリストの鬼怒無月氏によるコンサートが開催された。さらに二人の演奏に合わせ、広島市立基町高等学校校華道部による花生けパフォーマンスも行なわれ、参拝者からは盛大な拍手が送られた。その後、午後四時より刈屋形神楽団による神楽「塵輪」「恵比寿」、午後七時からは「鍾馗」「八岐大蛇」が披露された。境内では奉納された菊の花が飾られ、広島島の地酒が振る舞われた。気温が三十度を超える暑い日であったが、土曜日ということで多くの人が来場、特に外国人の参拝者が目立ち、重陽祭は盛大に行われた。

(池田憲明 通信員)



呉支部

「ひな祭りの会」

令和五年三月五日、快晴の春暖の日。吉浦八幡神社、吉浦敬神婦人会（横田欣子会長）主催の「ひな祭り会」が初めて開催されました。会員の升本順子様の感想を紹介します。

小学生による神前神楽舞「浦安の舞」が奉奏された式典後、平室峯子副会長が「ひな祭り会を開催します。桃や春の花を一本神様にお供えし、今日は皆笑顔で楽しみましょう。」と挨拶しました。花の溢れる中で、箏・バイオリン・アコーディオンの奉奏です。演奏者は大心池由美様、岡野志保様、留学生のウィリアム・ヴェドリヌ様です。留学生の方は紬の着物をキリッと着て、とても流暢な日本語を話されました。



演奏終了後、池田弘子副

会長が「氏神様と二緒に聴か

せていただき、正に神人和楽

でした。」司会を務めた薄井喜

代子副会長も「素晴らしい音楽を聴か

せていただき長生きできます。」と締め

くくりました。生け込んだ花や奉納さ

れた花を参拝者は持ち帰りました。

神社で「ひな祭りの会」を開催し、会

員皆が力を合わせたこと、笑顔で睦み

心が和んだこと、全てが素晴らしかった

です。コロナ感染症で長い間重苦しい

日々を送ってきましたが、とても華やか

で幸せな気持ちの一日となりました。

（横田光則 通信員）

支部
だより

安芸高田支部

「毛利元就公没後四百五十二年墓前祭」

令和五年七月十六日に戦国時代の武将毛利元就公の遺徳をしのび、元就公墓前祭を元就公ゆかりの郡山山麓鎮座清神社（波多野公一宮司代務者）により執り行った。

毛利家の毛利元敦氏、山口市豊栄神社の真庭宗雄宮司、洞春寺の深野宗泉住職、安芸高田市市長、防府市長、三原市教育長、北広島町長をはじめ多くの参列があつた。波多野公一宮司代務者が祝詞奏上、毛利奉賛会田丸道男会長や毛利元敦氏、安芸高田、防府市長らが玉串を奉奠した。

今年、戦国時代の武将毛利元就公が家督を相続し、猿掛城から郡山城に入城して五百年という大きな節目の年を迎える。元就公は元亀二年六月十四日、郡山城において死去、七十五歳の生涯を遂げるまで、戦国時代の日々を郡山城で過ごした。公は多くの訓えを残している。「協

同一致」を訓えた「百万一

心」と「三矢の訓」は今なお世

代を超え、安芸高田市民の心

のよりどころとなっている。

主催した毛利奉賛会は四百五十二年間にわたる歴史ある元就公墓前祭と、墓所の保存など、これからも後世に引継ぐべく取組んでいくとしている。

（波多野公一 通信員）



府中芦品支部

「素盞鳴神社、四年ぶりの『祇園祭』通常斎行」

福山市新市町の素盞鳴神社（江熊康夫宮司・川崎直総代会長）では、令和五年七月十四日から十六日まで四年ぶりとなる「祇園祭典」（佐藤英之祭典総責任者）の通常での斎行を、地域を挙げて盛大に執り行われた。

昨年は、百二十年ぶりに新調された神輿を境内において「重ね合わせ」の行事を行つたが、今年は福山方面からの参拝者のために最終の福塩線に間に合うように全体の時間が早められるなどの対応がとられ、また祭の様子はSNSなどで広く発信されるなど、今までにない多彩な取り組みが行われた。祭典は、例祭の後、相方地区氏子衆による「幡入れ」、神職による「御霊入れ」の後に町内巡行を経て、三体の神輿が順番に、お旅山の急坂を登りお旅所に遷座する「お旅山渡御」が行われた。翌日には、各神輿が各氏子地域を隈なく巡行し、特に相方地区では、芦田川で行う「落とし清め」が行われた。そしてクライマックスは境内において、



三体の神輿が順番に行う「重ね合わせ」と、すべての行事が無事に斎行され、境内から参拝者がいなくなる深夜には「無言の神事」が行われ、今年の祇園祭は締めくくられた。

四年ぶりとなる祇園祭の通常開催には、様々な問題解決と、入念な準備が必要であり、主催者・参加者・参拝者などそれぞれの立場で、やるべきことをやり、みんなが「祭り」の意義を確認できた今年の「祇園祭」であった。

（尾多賀晴悟 通信員）

支部
だより

呉支部

「伊勢キャンポリー」

令和五年八月六日～八日の二泊三日で第十三回の神社スカウト全国大会が開催されました。八幡神社（呉市吉浦鎮座）所属のボーイスカウト呉第十五団（団委員長横田光則）もローバースカウト一名、ベンチャースカウト二名、ビーバースカウト二名と指導者・保護者計十一名で参加しました。今年の大会は舍営（旅館に宿泊）のみで残念ながら伊勢の地にテントを張ることは出来ませんでした。開会式では三重県神青が大会の奉告祭をして安全を祈りました。スカウト代表者三名が隊旗とプラカードを持って自団のPRビデオが映し出される中、行進しました。二日目スカウト全員で、内宮に参拝行進をし、参進の神聖さや、内宮の清々しさに感激していました。閉会式では三笠宮彬子女王殿下よりお言葉を賜り、相川七瀬のコンサートでは大変盛り上がりしました。熊野速玉大社、熊野那智大社を参拝しエネルギーを頂いて帰路につきました。スカウト達は次回も内宮参拝しよう！と目標を持ち意気込みを見せていました。伊勢キャンポリーに参加することは神社スカウトにとって誇りと意欲に繋がる大切なことだと再確認し、無事全国大会を終了致しました。

協賛頂きました広島県内の神社の皆様誠にありがとうございました。今後とも、真心こめたスカウト活動に勤しんで参ります。

弥栄！

（横田光則 通信員）



佐伯大竹支部 「八年ぶりとなる神社視察研修会を開催」

令和五年九月四日(月)、佐伯大竹支部では八年ぶりとなる神社視察研修会を開催し、十四名の参加者が山口県の防府天満宮、琴崎八幡宮に参拝した。

今回の視察研修は隣県で積極的な教化活動を展開している神社に参拝し、その取り組みについて学ぶのがテーマ。

防府天満宮では鈴木宏明宮司によるご講演を拝聴した。防府天満宮では「花回廊」、「七夕まつり」など地域を巻き込んだ大規模な神事や神賑行事を企画・運営されるとともに神道家の教化にも力を入れ、祖霊祭の重要性や祭儀の意義について神道家の人々のみならず祭業者にも説き広めている。また神道家の期待にこたえて納骨殿を建立するなど、現代社会のニーズに応えることにも配慮されていた。人口が減少していくなかで神社界がどう生き残りをかけていくのか常に考えて様々な施策を練り広げられている神社であった。

琴崎八幡宮では白石憲一権禰宜が同社の教化活動の取り組みについて紹介して下さった。同社では費用のかからないSNSを駆使し広報活動を展開しその結果、参拝者が増加したという。また、「五感で感じる神社」をコンセプトに「風鈴まつり」の創出や「夏祭り」の神事を復活させ、大人だけではなく子供たちが神社を訪れる機会を作り出すことに成功したとのことであった。



研修会を終えて櫻井建弥支部長は「神社の活性化について先進的な神社の取り組みを学ぶことができた。研修会で学んだことをそれぞれの奉務神社における教化活動に活かしてもらいたい」と述べていた。

(瀬戸一樹 通信員)

支部だより

安芸高田支部

「サンフレッチェ広島レジーナ必勝祈願」

サッカー女子プロリーグのサンフレッチェ広島レジーナは、今季の「二〇二三―二四 WEリーグ」開幕前の十一月十日、毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社(波多野公一宮司代務者)で必勝祈願祭を行った。

監督、選手とチームスタッフなど三十一名が参拝した。神事に先立ち、選手を代表し柳瀬楓菜、呉屋絵理子両選手が絵馬を奉納、栗原明夫権禰宜の必勝祈願の祝詞に続き、久保雅義レジーナ事業本部長、中村伸監督、近賀ゆかり選手が玉串を奉奠しリーグ戦での健闘と必勝を祈願した。中村監督が、毛利元就に扮した甲冑姿の地元

市民からチームの象徴でもある「三矢の訓え」にちなんで三本の矢を受取り、必勝祈願祭を無事終了した。昨年に続いての必勝祈願祭となった。

十一月十八日の「二〇二三―二四 WEリーグ」開幕戦では、アウェイの長野UスタジアムでAC長野パルセイロ・レディースと対戦し、惜しくも初戦を落としたが、リーグ開幕に先立ってのカップ戦で初優勝しており、今期の活躍が期待される。

(波多野公一 通信員)



編集 後記

庁報第152号をお届けいたします。
新型コロナウイルス感染症も季節性インフルエンザと同等の五類に移行され半年以上が経過しました。
各地で観光客誘致の対策が取られ、とりわけ広島ではG7サミット(主要国会議)が開催されたおかげで、海外からの注目度も高く、コロナまん延前の人出を超える人が押し寄せています。

社頭が賑わうことは喜ばしい限りですが、各産業が観光客の急増に追い付かず、オーバーツーリズム等の課題も新たに出てきているようです。御朱印ブームも一過性に止まらず、人出とともに希望者も増えているように感じます。

ようやくお参り頂けた参拝者に、「来てよかった」「またお参りしたい」と思ってもらえるようにお迎えしたいものです。
庁報編集委員一同

広島市支部

「東照宮本地堂保存修理工事終了」

令和三年九月に起工祭が行われた、東照宮（久保田実技宮司）「本地堂」の保存修理工事が、令和五年九月に終了した。

慶安元年（一六四八）建立で、明治時代の神仏判然令まではご祭神の本地仏を安置していた市重文の建物。この度二年の歳月をかけて全解体修理を行い、創建当初の姿に復元された。

建物解体により、当初の姿は工事以前の「朱漆塗」ではなく、木目を浮き出す透明度の高い「春慶塗^{しゅんけいぬり}」であったことが発見され、この度建物外部をこの高度な技術で塗装し、光沢のある重厚な建物として蘇った。設計監理を請け負った（公財）文化財建造物保存技術協会によると、「春慶塗」で外部を塗装した建物は全国で例がないとのこと。久保田宮司は

「想像以上の出来映え。今後は国の重文を目指したい」と語った。

東照宮では引き続き周辺整備事業を行い、令和六年五月に竣功祭を予定している。

（池田憲明 通信員）



支部だより

安芸支部

「日浦山神社八百年祭」

西日本豪雨により甚大な被害を蒙った日浦山神社（齋木至公宮司）で、令和三年十二月大鳥居再建、令和五年六月境内背後の砂防ダム完成、演舞台や手水舎、寄進者記名の玉垣、灯籠も整備され十月三日に復旧工事が完了しました。

八百年祭では完成したばかりの演舞台で和太鼓や神楽、餅まきなどが行われ、久方振りに神輿渡御の露払いの格式を持つ、『頂載^{ちやうさい}』が御披露目されました。

鎌倉時代の千二百二十三年創建と伝わる日浦山神社の齋木宮司は、「平成三十年の西日本豪雨災害により被災した境内地も五年の月日を経て再建することができました。また、今年は創祀八百年という記念すべき年に多くの氏子・崇敬者の方々にご参拝頂き無事秋季例祭を終えることができましたこと心より嬉しく思います。昔の賑わいを戻すためにもこれからも神明奉仕に努めてまいります。」と語っていました。

（宗像利道 通信員）

